爆心地から生きる

―近距離被爆者の医療をたどって―

（原爆放射線医科学研究所所蔵資料および
鎌田七男資料より）

＊入場無料＊

2017年 8/4㊎～10/19㊍

広島大学医学部医学資料館

10：00～16：00（日曜日・祝日・夏季休暇日閉館）
広島大学霞キャンパス（大学病院前）

主催　広島大学原爆放射線医科学研究所
共催　放射線災害・医科学研究拠点（広島大学・長崎大学・福島県立医科大学）
企画・製作　広島大学原爆放射線医科学研究所附属被ばく資料調査解析部

＊展示問い合わせ　TEL：082-257-5877　附属被ばく資料調査解析部

ご挨拶

本日はご来場いただきまして誠にありがとうございます。

広島大学原爆放射線医科学研究所（原医研）が「爆心復元調査」に着手して、間もなく半世紀を迎えます。

原医研所長を務められた鎌田七男名誉教授は、この調査が基になった近距離被爆生存者に関する総合的な医学研究を通じて、500m以内の被爆生存者78人の健康調査に長年取り組んでこられました。ご退官後も現在に至るまで、被爆者の方々に寄り添い見守り続けておられます。

このたび、原医研が鎌田先生から関係資料を受領いたしましたのを機に、「爆心復元調査」など原医研の所蔵する資料と合わせてその一部をご紹介することと致しました。これらは原爆の非人道性を物語る第一級の資料であります。資料についての整備や研究は端緒に就いたばかりで展示は未熟なところも多くございますが、まずはこの貴重な資料の存在を皆様に知っていただきたいと考え、企画に至りました。皆様が「かの日」のできごとと、これからの未来を改めて思うきっかけになれば幸甚です。また、これから本資料の整備と研究に邁進いたします。今後ともご支援、ご教示を賜れれば幸いであります。

なお、末尾ながら、本展示にあたりまして、多大なご協力を賜りました鎌田七男名誉教授、並びに関係各位に篤く御礼申し上げます。

広島大学 原爆放射線医科学研究所所長
松 浦 伸 也

展示について

本日は本展示に足をお運びくださいまして、誠にありがとうございます。

原爆投下は、世界、社会、また人々の意識を一変させた人類史上最大級のできごとであり、その現場となった広島ではその直後から過酷な現実が出現しました。そして、今も世界で核の問題がうまく解決できないのと同じように、広島の原爆に関することも、解明尽くされたとは言い難い状態です。私たちの「広島」には、まだまだ「宿題」が多く残されています。

しかしながら、「広島」は怠けていた訳ではありません。近距離被爆者の方だけでなく、被爆されたすべての皆様は、そのときに亡くなった方の分も背負って、実に果敢に「爆心地から生き抜いた」のだと思います。そしてまた、そんな皆様とともに歩もうとした人々や社会があり、実相の解明のための科学的な研究が、ここ「広島」にはありました。

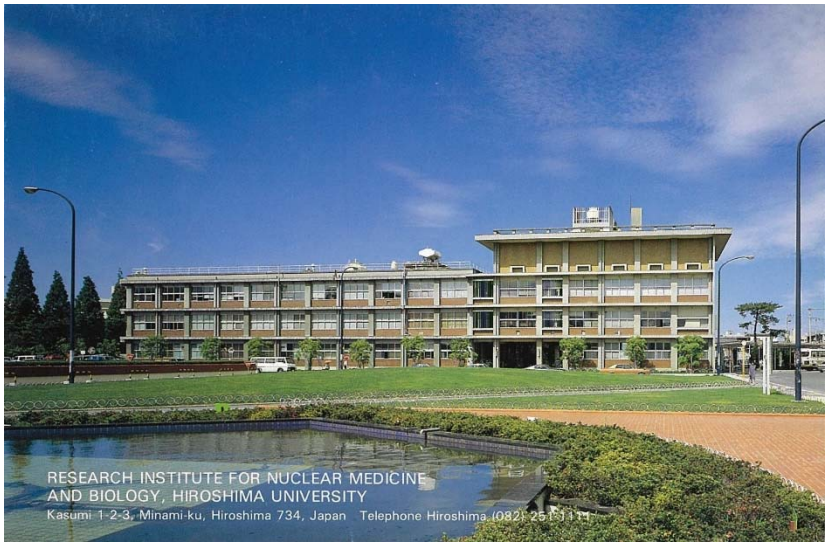
今回の展示は、そういったなかでの原医研の取り組みと、現在まで継続されて被爆者医療に邁進されている鎌田七男先生の活動の一端を、先生からお預かりした資料と合わせてご紹介したいと思います。

資料の分析や研究はこれから取り組みます。まずはこういった貴重な資料が現在まできちんと残されていたことを皆様にご報告いたしますことが今展示の最大の目的です。小さく未熟な展示ではありますが、皆様にとって、「爆心地から生きる」ことを継承している現在の私たちの「これから」に思いを馳せるきっかけになれば幸いです。

広島大学 原爆放射線医科学研究所
附属被ばく資料調査解析部

展示表記について　本展示の文章中、物故者でいらっしゃる志水清先生、湯崎稔先生については敬称を省いております。予めご了承ください。

1.
原医研の設立



在りし日の原医研　1980年代に作成された英文パンフレットの表紙写真。当時の名称は「原爆放射能医学研究所」であり、建物は現在の大学病院の近く、キャンパスの玄関口にあった。

原爆放射線医科学研究所　所蔵

原爆が投下された地の大学に放射線影響の医学研究機関を設立する構想は既に第五福竜丸事件の1954（昭和29）年にあったが、実現には数年がかかった。そして、初代学長・森戸辰男や医学部長（当時）・河石九二夫らの奔走により、1961年に現在の原医研の前身である原爆放射能医学研究所が設置された。これは、初代所長の渡辺漸（すすむ）の言によれば「原爆放射能による障害の根本的対策の医学的究明を目的とする独立した、且つ高度の機能を具備した研究機関を設立」することが「広島大学それ自身の使命」であり、また「地域社会の強力な支援を得て本研究所設置の決意を披瀝（ひれき）し、互いに協力」した結果であるという。こうして、現在の放射線災害の医学研究につながる、原爆に関する多くの重要な医学研究と「復元調査」の基盤が作られたのであった。

西暦（和暦）	できごと
1958（昭和33）	医学部附属**放射能基礎医学研究施設**設置
1961（昭和36）	**原爆放射能医学研究所**設置…障害基礎研究部門、病理学・癌研究部門、疫学・社会医学研究部門、臨床第一（内科）が置かれる
1962（昭和37）	血液学、遺伝学・優生学、化学療法・生化学、臨床第二（外科）増設
1967（昭和42）	附属原爆医学標本センター設置
1969（昭和44）	生物統計学研究部門増設
1970（昭和45）	病理学・癌研究部門を病理学に改称し、放射線誘発癌研究部門増設
1974（昭和49）	附属原爆医学標本センターを原爆被災学術資料センターに改称
1994（平成6）	附属原爆被災学術資料センターを国際放射線情報センターに改組 10研究部門から４大研究部門に改組
2002（平成14）	研究所の名称を**原爆放射線医科学研究所**に改称
2010（平成22）	国際放射線情報センターを附属被ばく資料調査解析部に改組

「原医研」沿革～2度の改名　現在「原医研」と略されるこの研究所も当初は「原基研」であった。改名や組織の増設・改組・再編成は、その時代に要請される研究に応じている側面もあるが、それでもルーツ（アイデンティティ）となる「原爆」の2文字は消えることはありえないであろう。

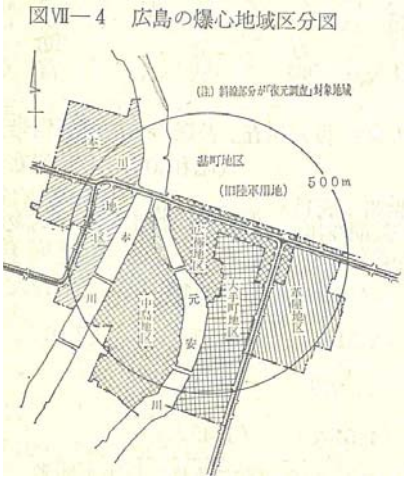
原爆放射線医科学研究所ウェブサイト等より作成

2. 爆心地半径500mの調査

広島の原爆によって、どれほどの人が死に、どれほどの人が傷ついたか、ということは、原爆災害や被爆影響の問題を考えるうえで、きわめて重要な基本的問題である。しかし、こうした原爆の閃光とかかわった被爆人口の実数や、広島の街々が全体としてどのように破壊されたかということは、原爆が落とされてから三〇年というのに、いまなお正確に判っていないのである。

これは原医研で復元調査を主導した湯崎 稔が『原爆三十年』に示した言葉である。そしてこの指摘は70年を過ぎた現在も解決していない。そのことからも、彼らの「爆心復元調査」の取り組みが如何に重要であったのかがわかる。

1966年8月、NHK広島はドキュメンタリー「爆心半径500メートル」で、平和公園地域に住んでいた人々の消息を呼び掛けた。それは、その後のNHKの爆心地図の運動の起点にもなり、市民の活動もうながした。また、このころは「原爆被災白書運動」の機運も高まっていた。そういった動きとともに、1968（昭和43）年、原医研では志水清所長のもと、湯崎の所属する疫学・社会医学部門が中心となって「爆心復元調査（爆心追跡調査）」が本格的に始まった。このプロジェクトは、「学界の常識からすれば、賭けともみえるものであった」と、志水清編の『原爆爆心地』（1969年刊行）ではその難しさが述べられている。



出典：広島市編『原爆三十年』（1976年3月、広島市）、389頁に掲載された爆心地域区分図

（右）爆心地復元図を見る志水清　1969年7月19日の中国新聞の記事「広島市　爆心地復元ほぼ完成　広大原爆放射能医学研が調査」に掲載されたもの。

中国新聞社 提供

（左）「爆心地域区分図」
1976年に刊行された『原爆三十年』では湯崎稔も共同執筆者であり、「爆心復元調査」部分は彼の筆によるものであった。

志水 清
（1906～1991）

志水 清　1970年刊行の『原爆放射能医学研究所年報』第10巻に掲載された近影。

西暦（和暦）	できごと
1906（明治39）	大阪で生まれる（本籍は岡山県津山市）
1930（昭和5）	第六高等学校卒業後、岡山医科大学入学
1935（昭和10）	岡山医科大学卒業→岡山医科大学副手
1937（昭和12）	広島逓信診療所（広島逓信病院）勤務
1942（昭和17）	陸軍技師として東南アジア方面に従軍
1946（昭和21）	復員後、広島逓信病院勤務、のち厚生省勤務
1948（昭和23）	大阪府衛生部公衆衛生課長
1950（昭和25）	島根県衛生部勤務（衛生部長、厚生部長等歴任）
1959（昭和34）	広島市保健局長
1961（昭和36）	広島大学原爆放射能医学研究所教授
1967（昭和42）	広島大学原爆放射能医学研究所長（二期）
1970（昭和45）	大学退官後、ABCC医科社会学部長等歴任
1991（平成3）	7月24日、死去（84歳）

『原爆放射能医学研究所年報』第10巻（1970年）等より作成

1945年8月の「その時」、志水 清はシンガポールで任務に就いていたが、彼の妻と二人の子供は広島市内で被爆、広島二中の一年だった次男は即死であった。その後、彼は広島を離れ、特に島根県では10年近く重要な責務を果たした。そして「次男の霊がよんだのでしょうかなあ」と、広島に戻る。自身の家族を含む被爆・被災した広島の人々への思いと役人として敏腕を振るった行政での経験は、様々な調査研究や活動に大きく生きたことであろう。志水の功績は被爆者に対する医学の調査研究や原医研の発展への努力、被爆者の援護や医療に関する法整備、行政への提言などの多くの場面に見られた。しかしやはり、その中心には原爆の社会影響研究の基盤となる「復元調査」と、そこからつながる近距離被爆者に対する医学研究が据えられていたと考える。そしてその原動力には、生き抜こうとする被爆者のそばに寄り添う志水自身の強い気持ちがある。

「復元調査」は医学研究機関が主導するものとしては独特であった。それはつまり、原医研の所長であった志水への負担もまた特別であったことを意味する。しかし、若手の強力な人材・湯崎を得て、志水はこの事業を強く進めることとした。

西暦（和暦）	できごと
1931（昭和6）	広島県呉市で生まれる
1957（昭和32）	3月、中央大学文学部哲学科卒業
1957（昭和33）	4月、総理府内閣総理大臣官房審議室勤務
1958（昭和34）	神奈川県川崎市公立学校教員勤務
1961（昭和36）	原爆傷害調査委員会（ABCC）入所
1966（昭和41）	広島大学原爆放射能医学研究所勤務
1967（昭和42）	原医研附属原爆医学標本センター勤務
1969（昭和44）	原爆放射能医学研究所助手
1974（昭和49）	原爆放射能医学研究所助教授
1980（昭和55）	広島大学総合科学部助教授
1982（昭和57）	広島大学総合科学部教授
1984（昭和59）	6月11日、脳出血のため死去（54歳）

『社会文化研究（広島大学総合科学部紀要II）』第10巻（1984年）等より作成

湯崎 稔
（1931～1984）

湯崎 稔「湯崎稔教授を悼む」（1984年）に掲載された写真。

湯崎 稔の1945年8月の「その時」は中学2年で、中国の大連にいた。1947年の日本への引き揚げのときに少年はニュース映画で初めてきのこ雲を見て「大変だ」と思った。郷里の呉に戻る時には、通過した夕暮れの廃墟の広島に驚いた。そして、少年のこの原体験は色あせることは無かったのだろう。その後、社会学者となった湯崎は、被爆の全体像を見極めるべく、力を尽くす。

「総合的な調査、全体像をとらえるための調査を」という強い思いは、ABCC（原爆傷害調査委員会）への就職後まもなく持ったと言う。湯崎にとってABCCでの経験は「復元調査」に役に立ったであろう一方、医学調査（疫学調査）が中心となるABCCの姿勢には不満があった。それは「被爆者個人を対象としているために町や家族、社会などに与えた影響を検討しない」という問題であり、ABCCでは主目的にできない、実施の難しい部分でもあった。そこで湯崎は原医研にうつり、NHKや多くの市民を巻き込んで調査を推進した。**「体験の継承とは市民の立場で全事実を再構築することだ。」**これは湯崎の言葉だが、ここに彼の強い信念を見る。実際の調査は困難も多かったが、この信念はぶれることはなく、そして「復元調査」は遂行された。

鎌田七男（1937～）

鎌田七男名誉教授近影『被ばく者医療に携わって：医師鎌田七男16年の足跡』（2017年）掲載。

西暦（和暦）	できごと
1937（昭和12）	現在の中国・瀋陽で生まれる（本籍は鹿児島・吹上）
1961（昭和36）	広島大学医学部医学科卒業
1962（昭和37）	4月、広島大学原爆放射能医学研究所 臨床第一（内科）部門副手 5月、広島大学原爆放射能医学研究所助手
1967（昭和42）	アメリカ・カリフォルニア大学サンフランシスコメディカルセンター臨床病理部門留学
1971（昭和46）	広島大学医学部附属病院　講師
1976（昭和51）	広島大学原爆放射能医学研究所　助教授
1983（昭和58）	京都大学放射能生物研究センター客員助教授（併任）（～1985（昭和60）年）
1985（昭和60）	原爆放射能医学研究所血液学研究部門教授（～2000（平成12）年3月）
1997（平成9）	原爆放射能医学研究所所長（～1999（平成11年）3月）
2000（平成12）	4月、広島大学名誉教授
2001（平成13）	財団法人広島原爆被爆者援護事業団理事長 広島原爆養護ホーム倉掛のぞみ園長（兼務）
2017（平成29）	広島原爆養護ホーム倉掛のぞみ園長勇退 現在、本郷中央病院（広島県三原市）勤務（被爆者健康相談）

「鎌田七男先生オーラルヒストリーインタビュー」（2017年、学習院大学、科研報告書所収）等より作成

1945年8月6日、年端も行かない鎌田少年は疎開先の奉天（現在の中国・瀋陽）にいた。前述の志水・湯崎と違い、彼の若いころに「広島」や「原爆」の影は薄い。しかし、これらとは違う厳しい現実を彼は生き抜く。1946年に鎌田家は郷里・鹿児島に引き揚げを果たすが、それまでに家族を亡くす不幸もあった。そうした混乱と困難のなかを生きたその家の7番目の息子には、広島で被爆者の医療に取り組む人生が待っていた。

鎌田名誉教授によれば、1955年に広島を訪れた際、原爆に関する言葉を軽々しく口に出せない雰囲気、被爆者への社会的圧迫感を感じたという。そして彼は「被爆内科」入局時に被爆者をより強く意識することとなる。彼の主要の研究テーマは「染色体研究」であるが、その中でも被爆者染色体に着目し研究を進める。そのうえで彼は、復元調査から発展的に始まった近距離被爆生存者に関する医学研究に積極的に参加することとなったのであった。

3. 研究の系譜

「爆心復元調査」では、広島の市民の協力と報道と取材の力を持つNHKとの協働が重要であった。ただ、医療行政の経験を持つ志水、総合的で社会学的観点を持つ湯崎、そして鎌田名誉教授を含む医学研究者がいる機関の原医研が関わることは、それなりの意義も与えた。その1つは、原医研での「近距離被爆生存者に関する総合医学的研究」プロジェクトであろう。このプロジェクトの成果は被爆者医療や実相の究明に様々な影響を与えることとなった。鎌田名誉教授は、この志水→湯崎→鎌田と続く研究の系譜について「３人に共通するところは苦労して引き揚げており、被爆者の苦労、気持ちを理解し易く、ある種の共有心を持ち合わせていた」と、研究者としての気持ちや気概を分析する。

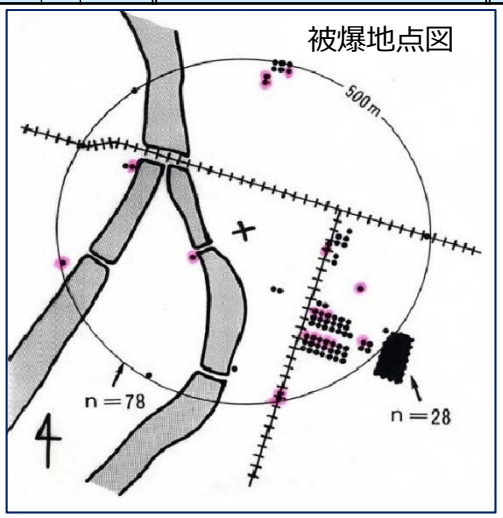
長く続いたこのプロジェクトも、鎌田名誉教授の勇退もあって研究所としてはいったん区切りがつくこととなった。しかし、被爆者に終わりはない。そして鎌田名誉教授も力を尽くすことを終えなかった。それどころか、以前より力を増して被爆者のそばに立ち、切れのある頭脳と行動で、傘寿を迎えた今日までも研究を続けている。この研究の系譜に、社会における医学の在り方の本質を見る思いである。

西暦（和暦）	できごと
1966（昭和41）	春、原医研内で社会医学的な調査が検討される。 8月6日、NHK広島でドキュメンタリー「爆心半径500メートル」放送。
1967（昭和42）	春、NHK製作スタッフと原医研の調査スタッフとの協力関係が結ばれる。
1968（昭和43）	3月、NHKを中心に「原爆地図復元キャンペーン」実施、多くの市民が参加する。 原医研で「爆心追跡調査」が本格的に始動する。この時点で爆心地半径500メートル以内の生存者が60名以上いることが確認される。 NHKと原医研の共同で「被爆地図復元の論理と原爆被災総合調査の構想」を発表。
1969（昭和44）	「原爆被災復元委員会」設立（会長・志水清原医研所長）。これにより、市の事業として爆心地より半径2キロメートルの範囲（焼失地域）の復元をも目指すこととなる。 7月、志水清編『原爆爆心地』が日本放送出版協会から刊行される。
1970（昭和45）	爆心地半径500メートル以内の復元調査がほぼ完了。但し、原医研内ではその後も継続。 原医研内で収集された資料の情報やデータが整備され、医学研究への寄与が拡大。
1971（昭和46）	原医研内にて「近距離被爆者の総合医学調査」が実施される。
1972（昭和47）	1月、原医研教授会で「近距離被爆生存者に関する総合医学的研究」が正式に承認。 2月、上記プロジェクトが正式に始動する。

近距離被爆者78名の被爆地点

「鎌田七男作成資料より作成

	被爆場所	性別	被爆時年齢	被爆場所	線量Sv
1	日銀ビル 計22人	女	32	日銀１Ｆ　地下への踊り場　（訪問者）	*
2		女	3ヶ月	日銀１Ｆ　地下　（富岡さんの背中）	未結果
3		男	31	日銀１Ｆ　A室	2
4		男	41	日銀１Ｆ　A室	2.63
5		女	20	日銀１Ｆ　B課	*
6		女	16	日銀１Ｆ　B課	*
7		女	17	日銀１Ｆ　C局	*
8		女	16	日銀１Ｆ　D課	2.42
9		女	17	日銀１Ｆ	*
10		男	35	日銀	*
11		男	45	日銀２Ｆ	*
12		男	40	日銀３Ｆ　E課	*
13		男	44	日銀３Ｆ	*
14		女	19	日銀３Ｆ　F局	3.12
15		男	36	日銀３Ｆ　G課	2.3
16		男	41	日銀３Ｆ	*
17		女	17	日銀３Ｆ　H課	4.6
18		女	19	日銀３Ｆ　I課	2.23
19		女	19	日銀３Ｆ　I課	3.8
20		男	16	日銀３Ｆ　（２中学生）	5.8
21		男	34	日銀３Ｆ　J部K課	3.59
22		男	42	日銀３Ｆ　広島財務局	*
23	富国ビル 計18人	男	19	富国ビル地下　（K課書記補）	0.87
24		女	28	富国ビル１Ｆ　（受付L課）	2.52
25		女	21	富国ビル３Ｆ　K課	*
26		男	43	富国ビル３Ｆ　（M課）	*
27		男	39	富国ビル３Ｆ　（M課）	*
28		男	15	富国ビル３Ｆ　M課	0.67
29		女	15	富国ビル３Ｆ　L局M課	2.6
30		女	16	富国ビル３Ｆ　M課	3.23
31		男	20	富国ビル３Ｆ　M課	6.62
32		男	19	富国ビル３Ｆ　M課	6.1
33		男	46	富国ビル４Ｆ　N高女教師	*
34		男	32	富国ビル４Ｆ　M課	確認できず
35		女	15	富国ビル４Ｆ　M課	未結果
36		女	14	富国ビル４Ｆ　K課給仕係	2.4
37		男	17	富国ビル４Ｆ　M課実習生	*
38		女	17	富国ビル５Ｆ　（O保険会社員）	5.1
39		男	30	富国ビル６Ｆ　（O保険事務員）	2.4
40		男	20	富国ビル7F　広島電信局	4.1
41	陸軍病院 計8人	男	20	第１陸軍病院　（千葉佐倉６４部隊所属）	3.1
42		男	32	第１陸軍病院　（沖田部隊所属）	3.33
43		女	27	第１陸軍病院	6.69
44		男	18	第１陸軍病院（宇品船舶司令部所属）	4.6
45		男	24	第１陸軍病院（第２２４師団工兵隊所属）	1.07
46		男	40	第１陸軍病院　２Ｆ（第１１連隊所属）	2.5
47		男	33	砲兵第５連隊兵舎　１Ｆ	0.84
48		男	34	第７部隊、基町第１病院	2.62
49	路面電車 計6人	男	32	電車「白神社前」	2.42
50		男	23	電車「白神社前」	1.1
51		女	19	電車「十日市」	1.2
52		男	53	電車「紙屋町」	*
53		女	26	電車「紙屋町」	3.43
54		女	15	電車「大手町１丁目（革屋町）」	*
55	芸備銀行 計5人	男	45	芸備銀行　北角路上	未検査
56		女	19	芸備銀行　１Ｆ	1.95
57		女	16	芸備銀行　１Ｆ	*
58		女	21	芸備銀行　１Ｆ	1.05
59		男	49	芸備銀行	1.92
60	袋町小学校 計4人	男	9	袋町小学校　地下室	*
61		男	9	袋町小学校　地下室　（４年生）	3.3
62		男	8	袋町小学校	2
63		男	38	袋町小学校　（教師）	*
64	本川小学校 計2人	女	11	本川小学校　１Ｆ廊下　（６年生）	4.97
65		女	18	本川小学校　１Ｆ職員室	3.9
66	住友ビル 計2人	男	45	住友生命　１Ｆ	5.92
67		男	41	住友銀行　１Ｆ	2.88
68	明治ビル 計2人	男	31	明治生命ビル　（P保険会社）	*
69		男	40	明治生命ビル１Ｆ　（P総務課長）	*
70	その他・自宅・職場・路上 計9人	男	36	海軍兵器監督所地下	2.96
71		男	50	大手町海軍管制本部３Ｆ	0.63
72		男	54	大手町４丁目	*
73		男	47	中島本町レストハウス地下	*
74		男	35	天神町寺の防空壕　（木挽町あたりの寺？）	1.87
75		男	27	鷹匠町自宅	1.38
76		女	22	塚本町路上　（鍛冶屋町郵便局局長代理）	1.37
77		女	22	材木町Q宅玄関	未検査
78		男	39	中町路上	2.69



上記は、鎌田七男教授の作成資料である（一部、個人情報保護のため加工）。鎌田教授は78名について、それぞれ一人ごとに資料やデータをファイルしてきちんと整理する一方、この78名全体についての総合的な情報もかなり詳細に整理してまとめている。実は上記の被爆地点の表には本来右側に長く延びる続きがあり、個人名や生年月日ほか、長期にわたる体調の変化や病歴などが細かく記載されている。これらは今回ご覧いただくことはできないが、その全体を印刷すれば恐らくこの展示室の壁一面を覆うことだろう。それは、78名の皆さんが鎌田教授に誠心誠意をもって応えた表れでもあり、鎌田教授が78名それぞれの方との交流を大切にしたうえで治療と研究を行ったという証（あかし）の曼陀羅（まんだら）のようである。

「近距離被爆生存者に関する総合医学的研究」の軌跡

＊以下の著者等の表記は展示用であり、学術論文等引用時の書き方と異なる。

報（西暦）	著者とタイトル
第1報（1973）	渡辺孟、岡本直正、**鎌田七男**、**湯崎 稔**、他「(1)研究の目的と方法」 丸山寛二、内野治人、岡本直正、**鎌田七男** 、**湯崎 稔**、他「(2)ドック形式による臨床医学的研究」
第2報（1974）	**鎌田七男**、内野治人、他「理学的ならびに臨床検査所見」
第3報（1974）	小熊信夫、内野治人、他「骨髄および末梢血の染色体分析結果」
第4報（1975）	大屋正章、岡本直正、**鎌田七男**、**湯崎稔**、他「臨床的所見」
第5報（1975）	山本脩、大屋正章、岡本直正、**鎌田七男**、**湯崎 稔**、他「体位,体力測定結果」
第6報（1976）	**鎌田七男**，岡本直正，大北威，他「臨床的異常所見と染色体異常率との関連性」
第7報（1977）	**鎌田七男**，大北威，岡本直正，他「リンパ球の形態異常と機能の偏位」
第8報（1978）	**鎌田七男**, **湯崎 稔**，谷忠憲，他「染色体異常率からの被爆線量の推定」
第9報（1979）	**鎌田七男**, **湯崎 稔**，山本脩，他「骨髄細胞の変化」
第10報（1982）	**鎌田七男**、**湯崎 稔**、他「ウィルス抗体について」
第11報（1984）	山本 脩, **鎌田 七男**, 他「昭和58年までの体位・体力測定結果」
第12報（1985）	重田千晴、田中公夫、蔵本淳、他「骨髄細胞のcolony assay」
第13報（1985）	**鎌田七男**、田中公夫、他「原爆被爆者にみられる染色体切断部位と癌特異的切断部位ならびに先天的染色体脆弱部位との関連について」
第14報（1986）	**鎌田七男**、重田千晴、柳原五吉、他「染色体異常細胞株とその分子生物学的研究」
第15報（1987）	**鎌田七男**、田中 公夫、紺谷 信子、他「トランスフォーミング遺伝子の検出」
第16報（1988）	**鎌田七男**、務中 昌己、蔵本 淳、他「胎盤絨毛ジンチチオトロホブラスト基底膜と反応する血清抗体の検出」
第17報（1988）	重田千晴、**鎌田七男**、他「Bリンパ球を使ったin vitro免疫能の測定（予報）」
第18報（1989）	**鎌田七男**、早川 式彦、蔵本 淳、他「anti-BAST抗体陽性率と被爆距離との関係」
第19報（1990）	**鎌田七男**、重田 千晴、早川 式彦、他「anti-BAST抗体について」
第20報（1991）	**鎌田七男**、早川 式彦、峠 哲哉、他「過去18年の死亡および疾病状況」
第21報（1993）	**鎌田七男**、田中 公夫、麻生 博也、他「染色体異常率から得られたABS93D推定線量」
第22報（1993）	田中公夫、麻生博也、他「染色体着色法による原爆被爆者のリンパ球の染色体転座の迅速な検出」
第23報（1995）	江口 真理子、**鎌田七男**、田中公夫、Mansyur Arif、他「500m以内被爆78名中に発生した第2例目急性白血病症例の分子細胞遺伝学的解析」
第24報（1996）	新谷貴洋、**鎌田七男**、他「髄膜腫発生について」
第25報（1997）	**鎌田七男**、早川 式彦、峠 哲哉、他「25年間の追跡調査結果」
第26報（1998）	田中公夫、新谷貴洋、石前峰斉、早川式彦、峠哲哉、木村昭郎、星正治、**鎌田七男** 「SKY(Spectral Karyotyping)FISH法による原爆被爆者の染色体異常の検出」
第27報（2002）	木村昭郎、**鎌田七男**「3重癌の発生2例」
第28報（2006）	**鎌田七男**、木村昭郎、早川 式彦「被爆60年の人生　500m以内被爆生存78名の追跡調査から」
第29報（2016）	**鎌田七男**、**湯崎 稔**「大線量被爆生存者78名の被爆後70年までの追跡調査結果」

1972年から始まった原医研での「近距離被爆生存者に関する総合医学的研究」は研究所を勇退されたあとも鎌田名誉教授が継続し、同時に彼は原医研所属でなくなってもそれぞれの被爆者との交流を続けた。そして昨年の研究会では既に鬼籍に入っている湯崎稔と連名で、集大成的報告を行った。

関連情報

1）オープニングセレモニー（資料受領式）

［日時］　2017年8月3日（木）14：00～15：00

［場所］　広島大学　広仁会館　中会議室

［内容］　資料受領式（受領書贈呈）

鎌田七男名誉教授ご講演

医学資料館にて展示内覧（～16：00）

2）（夏季限定）体験型展示

「顕微鏡をのぞいて染色体と骨髄を見る」

［日にち］　8/7、9、21、23、28の5日間

［時間］　14：00～16：00

※担当教員による解説があります。

3）鎌田七男名誉教授講演会

［日時］　2017年9月2日（土）　14：00～16：00

［場所］　広島市平和記念資料館　会議室

［主催］　広島大学原爆放射線医科学研究所

［演題］　原爆を生き抜いた78人の足跡

［講師］　鎌田七男名誉教授

資料展示「爆心地から生きる」パンフレット
編集　広島大学原爆放射線医科学研究所
附属被ばく資料調査解析部（久保田明子）
発行　2017年8月3日
発行　広島大学原爆放射線医科学研究所

撮影はご遠慮ください。
ご協力いただきますよう
お願いいたします。